

〔研究ノート〕

『オーウェル著作集』全四巻（平凡社）

翻 訳 点 検

— その 4 —

西 村 徹

ようやく第四巻に続いて第二巻を終り、いよいよ第一巻に移る。啞然とするようなものは、見当らぬわけではないが、量的にははるかに少なくなっている。

11の「彼らにとって、世界はたくさんだ」(p. 33 ; The world is too much with them., p. 39) は、なるほど会話では “That’s too much” は「もうたくさんだ」ではあるが、そのまま文章語にしても元の話し言葉の感じはほとんど抜けてしまう。やはり「彼らにとって浮世は憂世でしかない」だろう。

19のおしまい「われわれの反教會的感情のほとんどすべては、貧弱で罪のない旧英国教会に対して向けられている」(p. 71 ; 下線筆者 ; Nearly all our anti-clerical feeling is directed at the poor, unoffending old Church of England., p. 81)。オーウェルはカトリックの独善排他主義との対比において、むしろ英国教会に同情的であることを、むろん訳者は嗅ぎとっているのだろうが、いったい「旧英国教会」とはいかなるものであろうか。poor old boy などと使うときの、むしろ親しみの old のはず。「かわいそうな、害にもならぬ、おなじみの英国教会」とでもいうしかあるまい。「反教會的感情」も、それでもいいようなものの、もう少し軽く「坊主に対する反感」ほどのものであろう。

52の「その後彼らはどうした」(p. 120 ; “it now remains to tell,” p. 134) は単純に「話は終わったわけではない」だろう。

68〔キップリングの死について〕というタイトルは〔On Kipling’s

Death) の訳として、この際適当ではなかろう。キップリングが死んだのは1936年1月18日。オーウェルはこれを『ニュー・イングリッシュ・ウィークリー』1936年1月23日に発表している。死の直後に書いたものなのだから〔キップリングの訃報に接して〕であろう。

この中で、キップリングの詩を引いたうえで「これは単に調子よい響きがあるだけである。『マンダレーへの道』となると押韻以下である」(p. 142 ; may be only a jingle, and “The Road to Mandalay” may be something worse than a jingle, p. 159) とあるが、「これは単にちゃんちき囃子というだけのものだろう。『マンダレーへの道』となるとそれ以下だろう」で、jingle をただの「押韻」とはいかぬだろう。

次段落の「たいていの人々が言えることは」(p. 142 ; The most one can say, p. 159) は「せいぜい言えることは」であろう。

帝国主義者であって、同時に紳士であることは、当時まだ可能であったし、キップリングの¹人柄の立派さからして、それはたしかに可能だった。彼は現代の最も広く読まれている流行作家であったが、それでいて、おそらく彼ほど²自分の性格を俗っぽく見せびらかすことを終始一貫慎んだ人もほかにはいない、ということは³注目に値する。(p. 142 ; 下線筆者)

It was still possible to be an imperialist and a gentleman, and of Kipling's *personal* decency there can be no doubt. It is worth remembering that he was the most widely popular English writer of our time, and yet that no one, perhaps, so consistently refrained from making a vulgar show of his personality. (p. 160)

下線1は訳文のかぎりでは、つじつまが合っているが、原文は全くそんなことを言っていない。読まされる方では誤訳とは気づきようがないので、これはもっともこまる部類の誤訳である。「という点には疑いを挟む余地はな

い」である。下線2，上で「人柄」といっているのだから，ここで「性格」という必要はなかろうし，「自分の人柄を見せびらかすような俗っぽいこと」くらいの工夫はあってもよかろう。下線3は，なるほど「注目」していれば忘れないのだろうが，やはり忠実に「記憶」とすべきであろう。

「性に合わぬ墮落した天才」(p. 142 ; a man of alien and perverted genius, p. 160) は「けったいな，つむじまがりの天才」か。

末尾の文はいささか気になる。「しかし，今や彼は死んだ，抑え難い気持ちをもって，私は何か賞讃のしるしを…この物語作家に贈りたいと思う」(p. 142 ; But now that he is dead, I for one cannot help wishing that I could offer some kind of tribute . . . to the story-teller . . . , p. 160)。多分訳者は工夫したつもりなのだろう，と思いたい。しかし，この素直な散文を素直に訳して何か不都合があるのだろうか。素直に訳せばこうなる。「しかし，彼が死んだ今となっては，少なくとも私は何か賞賛のしるしを…この物語作家に贈りたいと思わずにはいられない」。これでなにか意に満たぬところが残るのだろうか。「抑え難い気持ちをもって」などと力み返る必要があるのだろうか。要らざる工夫は余計なお世話ということになるろう。

69のうち『家になど帰るものか』という推理小説に触れて，そこからの引用。

ゴアの生い立ちは厳格でそしてブルジョアであった。しかし，おそらく，ずっと昔，一族のなかにぺてん師とかそれ以下になる連中は，もちろん何か欲求不満の詩人がいて (p. 143)

Gore's background was austere and bourgeois, but perhaps long ago there had been some frustrated poet in the family, to say nothing of some would-be swindler or worse, (p. 161)

下手な小説だし英語もひどいとオーウェルが言っているからといって，こ

ここまでひどい日本語にすることもなかろうと思う。第一文は「ブルジョワ」に「的」を加えればすむ。しかし第二文は、つまり原文で but 以下は、すっかり改訳する以外に手はない。

「しかし、おそらく、ずっと昔、一族のなかにぺてん師まがいとかが、それよりひどい連中とかは言うにおよばず、挫折した詩人などがいて」ということ。もっとすごいのが、この引用を受けての一文。「道徳はそうするようにみえても、決して詩人を挫折させたりはしない。」(同前)の原文は The moral would seem to be, never frustrate a poet. (Ibid) 「その教訓は、けっして詩人の邪魔だてをするな、ということのようだ」であろう。

「また、犯罪はいつも信じられないほど苦痛のある、それでいて全くおもしろくもないやり口で犯されるのである」(p.144 ; and the crime is always committed in a way that is incredibly tortuous and quite uninteresting., p. 162) の「苦痛のある」は torture の連想で間違っただけだが、「まがりくねった」でしかない。『奥の細道』の英訳は A tortuous road to the deep north ともいう。たしかに芭蕉の辿った道は「苦痛のある」道ではあっただろうが…。

「そこで、今や四十五歳のピーター卿は、落ち着いて、それから探索もやめた」(同前 ; So it is time that Lord Peter, who is now forty-five, settled down and gave up detection., p. 162) というのも相当にすごいしろもの。It's about time we had some lunch. などという時の subjunctive のことも訳者はほとんど知らぬげだ。「今や四十五歳のピーター卿も、身を固めて、そして探索も打ち切る汐どきである」だろう。先に言った「啞然とするようなものは少ない」と言ったのも撤回しなければならぬようだ。

72の「私は、共産主義者が、『変わった職業』をイデオロギー的に有害であると評してくれるのを期待したいし、実際これは有害である」(p. 149 ; I should expect a Communist to describe *Odd Craft* as ideologically poisonous, which indeed it is., p. 166) では、訳者は expect というと「期待する」と、一つおぼえにおぼえてしまって、そうすると悪いことを「期待す

る」とは言わないから expect はいつでも良いことを「期待する」のだと思
いこんでいるらしい。ところが expect は良いことも、良くないことも、ど
ちでもないことも、はなはだ客観的に「予想する」のだとは知らないらしい。
いずれにせよ、これは「共産主義者ならば『変わった職業』をイデオロギー
的に有害だと言うだろうが、それはなるほどそのとおりだ」とせずばなるま
い。

73の「恐ろしい宿恨と陰謀」(p. 150 ; fearful feuds and intrigues, p.
169)の「宿恨」は「確執」の方がなじむだろう。

74の「Bと私は、Bの友達のビンズとそっと席をはずしたが、ビンズの方
は便所の方に立ち去ったので、私はこのことをメモした」(p. 173 ; B and I
slipped out with his friend Binns to see the latter's back to back house,
on which I took notes., p. 192)。ビンズだけが便所の方に立ち去ったのなら、
「Bと私」は便所に行かなかったのだから、「このことをメモ」すると
すればビンズが立ち去ったことだけということになる。立ち去ったことだけ
を何故どのようにメモするのか、とんと分からぬ。口語でなら、そして現在
時制でなら the latter's back to back house を「The latter (ビンズ) が
back house へ戻る」と無理矢理とれぬこともないかもしれぬ。しかし、こ
の文中でそんなことは起こり得ぬ。意味をなさないのだから勘ちがいもあり
得ぬ。これは「Bと私は、Bの友達のビンズとそっと席をはずし、ビンズの
住んでいる背中合わせの家というのを見にいった。その家のことを私はメモ
した」のだ。便所などを共有する背中合わせの家のことは『ウィガン波止場
への道』に記されることとなる。

「彼の友人のひとり、『のっぽ』(p. 185 ; a friend of his, a “dataller”,
p. 205)は「彼の友人の『日雇い』」がよろしい。

ゴウバー坑に通ずる私鉄¹の沿線沿いで男たちが何台もの貨車に積んだボ
タを降ろしている。彼らは炭鉱が「ボタで閉鎖²することあねえ」と言って、
ボタをたくわえている³。これは不吉のしるしとみなされている。もし炭鉱

がすでにボタをためているとすると、炭鉱はまもなく底をついてしまうだろう。(p. 193 ; 下線筆者)

Men along the private line leading to Gauber pit unloading trucks of slack. They say the mine “can’t get shut o’ t’slack” and are laying it by. This is regarded as a sinister sign. If the pits are storing slack already they will soon be running short time. (p. 213)

下線1の「私鉄」は「引込線」というだろう。下線2は、そういうことでもあろうけれども「ボタで動きがとれやしねえ」というのではなかろうか、と私もあまり自信はない。3は「積みあげている」だろう。4は、そういうことにもなるだろうが、ちょっとその手前で、なにしろ主語が they だから炭鉱そのものとはとれず、炭鉱当局だろうから、「時間短縮をやるだろう」ではないかと思う。どちらも労働者には脅威だから当面「時短」の方だろう。

83の「二律背反主義」(p. 207 ; antinomianism, p. 226) というのはどういう主義なのか分からないが「反律法主義」なら分かるだろう。

「われわれが命綱としてすがらねばならない真実は、普通の立派な人間であって、しかも完全に目覚めていることができるということである」(同前 ; 下線筆者 ; The fact to which we have got to cling, as to a life-belt, is that it is possible to be a normal decent person and yet to be fully alive., Ibid) はこれでよいのだけれども、下線部分は「命綱のように手離してはならない事実」としたい。「すがらねばならない」のは、観念ではなく、すでに手にしている事実であることを翻訳の上でも繋ぎとめたいからである。

84の「この本は楽しませてはくれましたが、あまり考えさせてはくれませんでした」(p. 210 ; though it amused me I didn’t think a lot of it., p. 229) は「…、たいした作だとは思いませんでした」であろう。

85の「私も単なるわいせつなものに印象づけられたとは思われなくなかったからである」(p. 211 ; because, . . . , I did not wish to seem or to be

impressed by mere obscenity., p. 230) は「私も、わいせつそのものに感心しているとは思われたくはなかったし、実際に感心したくもなかったからだ」ということだろう。

「これはもともと芸術作品ではなかった」（同前； It was not primarily a work of art, Ibid）は「これは何よりもまず芸術を目ざす作品というわけではなかった」だろう。

110の「彼女の述べていることは、全く正しいのであるが」（p. 269； As she very truly remarks, p. 290）に間違いはない、といえるのは咄嗟の同時通訳ならばの話であろう。なぜ「彼女がまことにいみじくも述べているように」と言わないのか。この程度の素直な日本語の運用ができなくて、いかに透明平易とはいえ、いやそれなればこそ、オーウェルの英語を把え得るわけがなかろう。これに続いての「両陣営によって熱心に流布されている残虐行為の話は、右とか左とかを告発するというものではなく、単に戦争を告発しているのに過ぎないのである」（p. 269；下線筆者）の下線部分の原文は an indictment not of Right or Left, but simply of war (p. 290) である。simply が強意表現であることは既に述べたが、文脈からして（戦争という主題そのものが彼女すなわち著者にとって distasteful なものということが先立って記されている）、文章の勢いからして「単に～過ぎない」どころでないことは分かりそうなもの。「ひたすら戦争を告発しているものにほかならない」のだ。

119の「それは全く物悲しいほど正常な経過であるが、ゴールズワージーの場合にはおもしろい。若い時の人生観の苦々しさが、彼の本に否定し難い力を与えるのである」（pp. 282～283； It is a process almost drearily normal, but interesting in Galsworthy's case because of the fact that the bitterness of his earlier vision of life gave his books an undeniable power., p. 307）。翻訳は原文よりも短く文章を切った方がよい、などということを誰かにどこかで聞いたのもあろうか。しかし、それも、うまく切れる場合にかぎっての話。もともと一文なのに二つに切って、切れ目のところ

で読者はつんのめってしまう。きちっと「それは全く物悲しいほど正常な経過であるが、ゴールズワージーの場合それがおもしろいのは、若い頃に抱いた人生観の苦がさが、彼の本に否みがたい力を与えたという事実のゆえである」としてもらいたい。手抜きというより、こういうプッツン翻訳は困るのである。

「それ以降、明らかに彼には、自ら攻撃して彼に名をなさしめた人々と、もはや本質的な違いはない」(p. 283 ; 下線筆者 ; From then on it was obvious that he was in no essential way different from the people he had made his name by attacking., p. 308) の下線部分は「自ら攻撃し」たのも、「彼に名をなさしめた」のも同じ「人々」のように聞こえて「彼が攻撃して名を挙げた、その攻撃相手」とはなかなか分からないように思う。

ちょっと前のところで言い落としたが、「牛肉を食う種族」(beef-eating race) は「栄養のいい種族」だろう。

121で「これはなにも私にお世辞を言おうとしたものではありません」(p. 258 ; though it wasn't meant as such I took this as a compliment., p. 310) には原文を見てのとおり「が、私はこれをいいお世辞だと思っています」を加える必要がある。

同ページの「パンの練り粉に首をつっ込むこと」(pulling in the dough) は「金もうけ」。

* * *

126は「スペイン民兵についてのノート」。

「私は通常のイギリス陸軍の観念をもって行ったので、規律のなさにふるえ上がった」(p. 292 ; 下線筆者 ; I had brought with me ordinary British army ideas and was appalled by the lack of discipline., p. 318)。いくらなんでもこういう時「ふるえ上がった」とは、そもそも日本語文脈の中では言わないであろう。意味するところは同じでも「愕然とした」というだろう。

「加えて、地方司令官たちが、兵員を維持することに気を配り過ぎて、輝かしい成功を得るには被害を受けざるを得ないような時にも、被害を受けまいとしたことはたしかだ」（pp. 297～298；下線筆者；In addition, I am certain that anxiety to keep up numbers made local commanders over-anxious not to incur casualties when they could not gain *éclat* by incurring them., p. 325）。下線部分に言うほどまで消極的なのではなくて「死傷者を出したところで華々しい喝采を浴びられそうにもない時には死傷者など出したりすまいとした」のであろう。

127「恐ろしいことは、戦争に負けた場合、それが単純に¹、スペイン政府を崩壊するにまかせるような政策の強化を導き、自分がどこにいるのか分らないままに²、民主主義を守るもうひとつの戦争のまっただなかにいるようになることです」（p. 302；下線筆者；The ghastly thing is that if the war is lost it will simply lead to an intensification of the policy that caused the Spanish Govt to be let down, & before we know where we are we shall be in the middle of another war to save democracy., p. 329）。1「単純に」は「ひとえに」とか「ほかでもない」とすべきこと、もはや理由はくりかえさぬ。2は「崩壊するにまかせるもとになった（caused）政策」。3は「あれよあれよと思う間もなく」という単純で初歩的な成句。これを知らないとは！

128「聞くに値するほどの批評的意見を得る唯一の道は、宣伝文などに使われないような人物であることによってだからです」（p. 303；because the only way one can get any hearing worth having for one's critical opinions is by being the sort of person who can't be quoted on blurbs., p. 330）。誰が誰から批評的意見を聞くのか。この文章を読むかぎり、他人から批評的意見を聞くためには自分はこれこれの人物でなければならぬ、ということになる。ところがありていは、自分の意見を他人に聞いてもらうためには自分はこれこれの人物でなければならぬということである。読者には煩わしかろうが、英語に即して説明すると（そうしないと訳者には分かってもら

えそうにないので), get any hearing は「誰かに聞いてもらう」, worth having は「聞いてもらうに値する」だから繋ぐと「聞いてもらうに値する人に聞いてもらう」。いかなる内容に関してかというところ for one's critical opinions 「自分の批評的意見に関して」である。それは「自分が」これこれの「人物であることによる」のだ。「自分の批評を、聞いてもらい甲斐のある相手に聞いてもらうためには、自分がカバーなどに引用されることのあるりえぬ人物であるほかないからです」ということだろう。

131にオーウェルが書評しているジャック・コモンという労働者出身の作家からの引用が出てくる。

1時は来ている。比較的安楽なものでさえ、自らの選択または黙従によって作られた無法な政府の恐怖に苦しむだろう。まさに爆弾を投ぜられんとする者は共産主義を恐れることはない。2爆弾が投ぜられ、もし生き延びていけば、自分自身共産主義者になるだろう。…3それにはただ3圧迫が強まり、緊張の増加があれば、十分である。世界中の大衆が大事にはぐくむことを許されている持分の、4はかない、言ってみれば4空想的な仕切りなぞ吹き飛んでしまうだろう。(p. 131 : 下線筆者)

A time is coming when even the comparatively comfortable will suffer under the terror of lawless governments, created in their own choice or by their acquiescence. The about-to-be-bombed need not fear Communism. They will be Communists themselves by the time the bombing is over, if they survive. . . . For it only needs a turn of the screw, an increase of tension, and the fragile and rather imaginary partitions by which the masses of all the world are allowed to cherish their divisions will blow away. (p. 335)

下線1について。このように本来一文であるものをぶっ千切るについては、

あるいは訳者にはそれなりの理由があるのかもしれない。この方がハードボイルドのスタイルになっていいとでも考えてのことかもしれない。しかし、どう読んでみても原文のスタイルからは大きく離れる。時にはぶっ千切らなと文意が拡散してしまって、そうせざるをえない場合もあろう。しかしこの程度の、長くもない文章をスタイルをぶっ壊してまで、ぶっ千切るいわれは何一つなさそうである。いっきに訳してしまえばすみそうなものである。「比較的安楽に暮している者も、自らの選択によるにせよ、黙従によるにせよ、創り出された無法な政府の恐怖政治に苦しむ時代はせまりつつある」としてどこに不都合があろうか。ぶっ千切らねばならぬほど冗長であろうか。訳者は不必要に、原文にある言葉を節約して切捨ててしまう癖があるが、下線2も「爆撃の終わる頃には」といって不都合があるのだろうか。これも節約しすぎの一種だと思うが下線3にしても「もうひとひねり締め上げて、緊張の増加がちょっとでもあれば」として直訳にすぎて生硬になる恐れがあるのだろうか。つぎの文頭にも「そうすれば」を添えてやって原文から離れる恐れがあるだろうか。下線4は「架空の」とすべきであろう。

この引用を受けて「その通りである。しかしもしこれがたしかに起こることだとすれば、戦争を望み、画策することは、すべての社会主義者にとって義務になるのではないか。そして、考え深い人は、あえて今そうするか」(p. 308 ; 下線筆者)とオーウェルは書いている。下線部分の原文は *And dare any thinking person do that nowadays?* (p. 336) この棒ちぎれみたいな直訳を見れば、訳者はけっして直訳をしりぞけていたのではないことが分かる。節約すべきでないものまで切捨ててしまうのは、たとえ誤ってにせよ自らの文体を創出しようとしたのではなくて、ただ直訳しか、しかも不十分にしか、してはいなかったのだということがはっきり分かる。なにしろ「プロレタリアの独裁はもうその角を曲がっているかのように」(p. 309) などという安物コンピューター顔負けの超直訳をしてくれるのだから。原文 *as though the dictatorship of the proletariat were just round the corner* (p. 336) は、いくら即物主義で解釈するにしても「プロレタリアの独裁は

もうすぐそこまで来ているかのように」としないかぎり日本語としては通用しないだろう。

人民大衆は、その生まれつきの慎み深さを事態の制御に持ち込む機会を決して得なかったので、人は無力な時にのみ慎み深いものという皮肉な考えにともすれば追いやられがちである (p. 309 ; 下線筆者)

The mass of the people never get the chance to bring their innate decency into the control of affairs, so that one is almost driven to the cynical thought that men are only decent when they are powerless. (p. 336)

まず decency とか decent とか、これはオーウェルのきわめて頻繁に用いるキーワードである。ほとんど彼にとっての理想概念である。この著作集のあちらでは「品位」、こちらでは「慎み深さ」というのでは困るだろう。また「慎み深さ」は明らかに間違っているであろう。decent のばあい「卑しからぬ」というような訳語になることはあろう。しかし一定の統一はどうしても必要であろう。それが一つ。つぎに、この下線部分はその語の訳の間違いを除けば、直訳はなされている。しかし「持ち込む」とはどういうことなのか。原文の含意はそれほどに抽象的な表現で把えきれるのであろうか。「その生得の品位によって事態を制御するにいたる機会」くらいには言わないと原文の意味レベルにはとどかぬであろう。試みに全文を訳しなおせば「人民大衆は、その生得の品位によって事態を制御するにいたる機会がまったくない以上、人が品位を保ち得るのは無権力のばあいにかぎられるという皮肉な思いをほとんど禁じ得ないのである」とでもしようか。

ところで、これはおもしろい本である。これは経済学説としての社会主義について多くを語ることなく、信条の体系としての社会主義をおおいに

語り、平均的な教科書ではなく、人間の生き方、とまで言えるかもしれない。（中略）文学的表現——これはそれ自体では異常である——にこれが基礎を置いている事実を酌量しても、これは普通の男の当たり前の声である。この男たちは、もしそこに到達できるなら、事態の制御に新しい慎み深さを溶け込ませるかもしれないが、実際には、塹壕、汗をしぼる工場、監獄といったところ以上には決して進みそうもない。（p. 309；下線筆者）

Meanwhile this is an interesting book, which tells you much less about Socialism as an economic theory and much more about it as a body of belief, one might almost say a way of life, than the average textbook. . . . Allowing for the fact that it has found literary expression — which in itself is slightly abnormal — this is the authentic voice of the ordinary man, the man who might infuse a new decency into the control of affairs if only he could get there, but who in practice never seems to get much further than the trenches, the sweatshop and the jail. (p. 336)

前半はこれでいいように見える。比較級表現など完全に無視して見事に意識しおおせたかにも見える。訳文のかぎりでは立派に意味は通っている。しかし残念ながらおしまい「平均的な教科書ではなく、人間の生き方、とまで言えるかもしれない」は原意を離れてひとり歩きしてしまっている。やはりもう一度組み替えて、それぞれあるべき位置に戻す必要があるだろう。思い切って少々愚直に訳し直してみよう。「ところで、これはおもしろい本である。これは平均的な教科書に比べると、社会主義を経済学説として語ることはるかに少く、社会主義を信条の体系として、ほとんど一つの生き方と言えるようなものとして、語る場所はるかに多い書物である」。原文はそう書いている。これで意識を必要とするほどに分かりにくくだろうか。

後半になると大分しどろもどろだ。下線を引いたところなど、はっきり理

解もないままに行きあたりばったり闇雲に日本語に置き換えたというようなものだ。「文学的表現をとっている — ということそのものがいささか異常だが — という事実はあるとしても、これはしっかりした普通の男の声である。この男ならば、もしうまくいきさえすれば新しい品位によって事態を制御するにいたるかもしれないが、実際には、塹壕、労働搾取工場、監獄といった状況を大きく超え出ることには決してありそうにない」(下線部は元訳の下線部に対応) ということになる。

134の「純粹に効率からいけば、彼らが世界中のどんな政党をも完全に打ち負かしていること、確実に間違いない」(p. 313 ; For sheer efficiency they must surely have all the political parties in the world beaten hollow. (p. 340)。イエズス会が実際に世界中の政党と争って「打ち負かし」たわけではなくて、わずか二万二千人の組織でいながらイエズス会関係者が四十三もの会社に役員として名を連ねているという実力を、政党との比較として述べているのだから「効率だけでいえば、彼らは世界中のどんな政党をも確実に顔色なからしめるものと言わざるをえない」とした方が一層原意に沿うだろう。

「六月二十日頃、『マンチェスター・ガーディアン』のバルセロナの通信員は至急報を本国に送り、そのなかでPOUMに対するばかげた非難に矛盾することを書いた —」(p. 314 ; 下線筆者 ; about 20 June, the *Manchester Guardian* correspondent in Barcelona sent here a despatch in which he contradicted the absurd accusations against the POUM — ; p. 341)。「矛盾することを書いた」にはちがいなかろうが、これに続いて「あの状況では非常に勇気ある行為である」と賞賛しているのだから、そういう場合に日本語では「反駁する文章を書いた」というのが普通だろう。

「また、POUMがファシスト蜂起に対する最初の戦いに、前線でどんな重要な役割をしたかについて、注意深く触れていない」(p. 314 ; and is careful not to mention that the POUM took any serious part either in the first struggles against the Fascist rising or at the front., p. 342)。

これなど「注意深く触れていない」という、原文のどこにも該当箇所のない傍点を勝手に振っていることを別としても、腰の定まらぬ、ふらふらした日本語がちょっと気になる以外、どこにも問題がなさそうに見える。手抜きは見たところ表には見えないから始末が悪い。原文には「どんな重要な役割をしたか」などとは書いてはおらず、書いていないことを訳者は書いて、そのかわり either ~ or は素っとばしている。「また、POUMが、ファシスト蜂起に反撃する最初の闘争なり前線なりで、いささかなりとも重要な役割を果たした事など、いっさい触れないように気を配っている」のだ。

「共産主義者が、ひところの『社会ファシズム』論についてより以上の分別を示すことは、もはや不可能である」(p. 314 ; 下線筆者 ; it is no more possible for a Communist today to show common sense on this subject than on the subject of “Social Fascism” a few years ago., p. 342)。これは、もしも it is *not* more possible だったら、こういう訳になったろう。ざんねんながら not ではなくて no なのである。そうすると「共産主義者が、ひところの『社会ファシズム』論についてのとき同様、この問題についても分別を示すことはありえない」であろう。

141に三度(142にも一度)出てくる「血迷ったばか」(p. 327, 328, 330 ; bloody fools) は、いちいち「血迷った」をくりかえすほどのことはあるまい。いや一度も言う必要はあるまい。ただ「大ばか者」でよかろう。

「危機が回避されたあと、チェンバレン株が暴落したからとて驚くことは決してないと思います」(p. 327 ; I don't think one need be surprised at Chamberlain's stock slumping a bit after the danger is over., p. 356)。Slumping a bit というのだから「暴落した」のではなくて「ちょっぴり下落した」のだろう。「ちょっぴり下落」と「暴落」との差はちょっぴりではないだろう。「驚くことは決してない」というけれど「決して」は決して要らないだろう。

「人がまさに飛び込み板から飛び離れようとし、そこで初めてよく考える時」(p. 327 ; 下線筆者 ; when you are just going to dive off the spring-

board and then think better of it., p. 356)。「よく考える」のではなくて「考え直す」のだろう。

こんどは英語には関わりのない、純粹に日本語正用法の問題である。「ほんとうの問題は選挙で何が起こるかですが、保守党が真二つにでも分裂しないかぎり、労せずして勝つことを、私は予言します」(p. 327 ; 傍点筆者)。「保守党が～しないかぎり」といえば、保守党という主語が機能する範囲はそこで終るだろう。そしてそれを受けて「労せずして勝つ」主体は、もはや「保守党」以外のものと受けとるのが読者の心理の自然であろう。これを書いているオーウェルは当然労働党を支持しているから、これは労働党のことだろうと読者は思ってしまいうだろう。しかし、そうすると「保守党が真二つにでも分裂しないかぎり」(傍点筆者)とつじつまが合わないので目を白黒させることになるだろう。もし「保守党は」(傍点筆者)とさえ言ってくれていたなら、なにひとつどぎまぎせずすんだはずだ。

「チェコスロバキアを解体させたのちに」(p. 327 ; *after we've let down Czechoslovakia*, p. 356)は「チェコスロバキアを見殺しにしたのちに」であろう。

「労働党のはいり込める望みは」(p. 327 ; *The only hope of Labour getting in*, p. 356)は「労働党が選挙で勝つ望みは」だろう。

141について、これまで書いたことは一ページどころか半ページのうちに続けさまに出てきたものである。ほとんど続けてすべての文章を引用しておいてから物を言った方がよかったと思うほど連続して出てきた。というのはまさに驚くに値することである。

こんどは訂正箇所はたった一箇所だけれども、文脈からしてこんな間違いはありえないと思える間違いなので、まるまる一文ここに引く。「まず最初に国民を民主主義のための戦争にかりたてて、そのあと人々の腹が少しくちくなるところで急に方向転換して『さあ今や革命だ』というように考えるばかたちについては、私は軽蔑以外の何も持ち合わせません」(p. 328 ; 下線筆者 ; *I have nothing but contempt for the fools who think that they*

can first drive the nation into a war for democracy and then when people are a bit fed up suddenly turn round and say “Now we’ll have the revolution.”, p. 357)。fed up という日常語を知らぬのにも驚くが、この文脈の中で「腹が少しくちくなつた」りするかどうか、考えてみるまでもなく分かりそうなもの。アメリカを唯一の例外として、いかなる国民にとっても戦争に飢えはつきものであった。オーウェルを読めば、それはひしひしと分かるはず。どんな神経かしら、と私は思う。「人々に飽きが来たところで」ではないか。「ばかたち」（傍点筆者）という日本語も奇体だ。当然「ばかども」であろう。

142, 「党の最良の路線は、反ファシストのたわごとを開発すること」(p. 330 ; their best line is to exploit the anti-fascist stuff, p. 359) とはさっぱり分からぬが、じつは「反ファシズムだねを利用すること」であった。

選挙では、¹危機感が復活して、²合言葉はチェンバレンと平和を、となり、もし労働党が、「われわれは戦争を！」³と言って回れば、これは普通の人々が、実に正当にも、ヒトラーのたわごとに断乎たる路線を、と解釈するところとなり、全く保守党に食われてしまうことが、彼らには読めないようです。(p. 330)

They don't seem to see that the election will revive the spirit of the crisis, the word will be Chamberlain and Peace, and if the LP go round saying “We want war”, which is how ordinary people, quite rightly, interpret the firm line with Hitler stuff, they will just be eaten up. (p. 359)

1, 「危機感」ではいささかずれる。むしろ「非常時の精神」だろう。2 もいささか物足りない。38年9月29日のミュンヘンにおけるチェンバレンらによる宥和政策を呼び戻そうというのだから「チェンバレンを、そして平和

を」ぐらいまでは敷衍したがよかろう。3は、もし原文の which is how ordinary people というところ is how がなければ、このとおりの訳でよかろう。ところが is how があるのだから補語と目的語の位置関係は逆になるだろう。3の部分を書きかえるとすれば「—普通の人々は、実に正当にも、ヒトラーごときには断乎たる路線を、というのをそのように解釈しているのですから—と言って回れば」というのがとりあえずの訳として考えられる。出来のいい訳ではないが、元訳がどこまで間違っただかは分かりやすかろう。

143, 「低地のここは、平らなかわききった土地で、むしろ『返された』ままになっているだだっぴろい耕作地アロットメントの畠のようで」(p. 331 ; 下線筆者 ; Down here it's flat dried-up country rather like a huge allotment patch that's been let "go back", p. 360)。いったいどんな「ままになっている」のだろうか。訳者には分かっているのだろうか。これは「『痩せ地になる』にまかされている」のではないだろうか。

147の冒頭

パートランド・ラッセル氏の著書『権力』のなかに、もし内容空疎と思われる箇所があるとすれば、われわれは今、明らかなものをふたたび述べるのが知識人の第一の義務とされるような深みに、はまり込んでしまったのだ、というまでのことである。(p. 342)

If there are certain pages of Mr. Bertrand Russell's book, *Power*, which seem rather empty, that is merely to say that we have now sunk to a depth at which the restatement of the obvious is the first duty of intelligent men. (p. 375)

この訳のままだと私としては居たたまれないので、個別の説明は抜きにして、ともかくも私の訳をここに記させていただく。

パートランド・ラッセル氏の著書『権力』のなかに、いささかならずし
らけるところがあるとして、それをいうならば、とりもなおさず、われわ
れは今、わかりきったことをまた繰り返して述べるのが聡明な人の第一の義
務とされるような、落ちるところまで落ちてしまったのだ、ということだ
ある。

「また時には、この本でも見られるように、彼は重大な主題にふさわしい
真剣さを欠いている」（p. 343 ; and sometimes, even in this book, he is
less serious than his subject deserves., p. 376）は「…彼は重大な主題に見
合うほどには深刻にならない」であろう。

155, 「言い換えれば、はるかに大きな不正義を支持強化する以外、どう
やって『ファシズムと闘う』ことができるのか」（p. 364 ; In other words,
how can we “fight Fascism” except by bolstering up a far vaster injus-
tice?, p. 397）は頭のいい読者にはこれで十分かもしれないが、私のような
ボンクラには、何との対比で「はるかに大きな不正義」なのか、すぐには読
めなくてちょっとまごつく。「つまるところ、『ファシズムと闘う』ことな
ど、ファシズムよりもはるかに大きな不正義を支持強化する以外、どうやっ
てできるのか」といつてくれるとありがたいと思う。ファシズムより大きな
不正義というのは、英帝国の国力ならびに英国労働者の生活は植民地搾取の
上に成り立っている事実を指す。それには口を拭って反ファシズムをがなり
立てる英国左翼をオーウェルは皮肉っているのだ。また、このように対比を
きわだたせて訳しておいてくれる方が、すぐ続いて次の段落の初めの文章に
もうまくつながるだろう。次の段落の初めとはつぎのようなもの。段落の初
めだけでなく、その中からちよくちよく拾って取り上げなければならぬ半ペー
ジを、ここに一挙掲載することにする。

もちろんそれはいっそう大きいからだ。私たちがいつも忘れてるのは、
¹イギリス・プロレタリアの圧倒的多数がイギリスではなく、アジア、アフ

リカに住んでいることだ。²たとえば普通の労賃が一時間に一ペニーという
 現実³はヒトラーの力の及ぶところではない。それはインドにおいてはあり
 ふれたこと⁴なのであり、その状態を維持するためにわれわれは苦勞してい
 るわけだ。ひとり当たりの年間所得がイギリスでは八十ポンドを超えてい
 るが、インドでは約七ポンドであることを想起すれば、イギリスとインド
 との真の関係についても、なんらかの想像がつく。(中略)われわれすべ
 て⁵がそこで生活し、変革の危険がなさそうな時は公然と非難しているのが
 この制度である。(後略)

⁶たとえごく価格の低いものでも、どんな現実的な解決策がこの路線に沿っ
 て有り得るのか。(後略)

だが、⁷明らかに、真の反対勢力が不足しているので、これがわれわれの
 目標地点になりつつある。(p. 364 ; 下線筆者)

For of course it is vaster. What we always forget is that the over-
 whelming bulk of the British proletariat does not live in Britain, but
 in Asia and Africa. It is not in Hitler's power, for instance, to make
 a penny an hour a normal industrial wage; it is perfectly normal in
 India, and we are at great pains to keep it so. One gets some idea of
 the real relationship of England and India when one reflects that the
per capita annual income in England is something over £ 80, and in
 India about £ 7. . . . This is the system which we all live on and which
 we denounce when there seems to be no danger of its being altered. . .

What real settlement, of the slightest value, can there be along
 these lines? . . .

But apparently, for lack of any real opposition, this is going to be
 our objective. . . . (p. 397)

だから言わぬことではないと言おうか。それとも今様の俗語で、これには

コケるとでも言おうか。下線1は、これで翻訳のつもりなのか。そもそも is がイタリックになっていることがなぜ無視されるのか。「実際その方が大きい不正義にまちがいないはずだ」ぐらいの勢いであるにまちがいないはずだ。

2もまた何のことやら。「一時間一ペニーをあたりまえの労賃にすることなど、仮にヒトラーの力でも出来ることではない」とすべきだろう。

3も「それがインドではまったくあたりまえ」とすべきだろう。4は「腕によりをかけている」だろう。5は「これこそが、われわれみんなそのおかげでくらしていながら、変わる恐れのもったくない時にはいけしゃあしゃあと非を鳴らしている制度なのである」。6は「たとえかすかなりとも価値のある、どんな実のある解決策がこの路線に沿ってありうるか」。7は「どうやら、真の反対勢力が存在していないので」。

157, 「イギリス陸軍が将校の配属を、かなり嚴重に行なっているため」(p. 369 ; the fact that the British army is rather heavily officered, p. 402) は「イギリス陸軍は将校の占める比率がずいぶん高いから」。「将校の配属を嚴重に行なう」とは、将校を多くするのか少くするのか、どっちなのか分かる人がいるであろうか。そもそも多い少い以前に、いったいどうすることなのか、分かる人がいるであろうか。

* * *

つぎに取上げる162「チャールズ・ディケンズ」はオーウェルのエッセイの中でも、最も記憶さるべきもののひとつである。その中で『二都物語』最終章最初の段落からの引用がなされている。有名な、そして翻訳もよく売れている作品だから、今まで数々出くわしたようなひどい誤訳があろうはずもない。むしろ中野好夫訳（を当然訳者は見たろうが）とは異なる解釈をしていて苦心したらしいこともうかがわれる。つまり中野訳に疑問を呈したという点で一步も二歩も前に進んだ訳だといえる。それには十分なる敬意を表し

つつ、私になお残る疑問をここに記しておきたいと思う。今回は順序を逆に、オーウェルが引用した全文を先に掲げ、しかる後に問題となる第二文の平凡社訳を掲げる。

All the devouring and insatiate monsters imagined since imagination could record itself, are fused in the one realisation, Guillotine. And yet there is not in France, with its rich variety of soil and climate, a blade, a leaf, a root, a sprig, a peppercorn, which will grow to maturity under conditions more certain than those that have produced this horror. Crush humanity out of shape once more, under similar hammers, and it will twist itself into the same tortured forms. (p. 421)

しかし、フランスがどんなに豊かなさまざまな土と気候に恵まれているからといっても、このように恐ろしいものを生み出した土と気候の下では、一茎の草、一枚の葉、一本の根、一条の枝、一粒のからし種さえも、成熟するまで着実に育ってゆく保証はない。(p. 385)

ちなみに中野訳は「しかもこのフランスでは、あれだけ地味も風土も豊富な変化に富んでいるにもかかわらず、いまこの恐怖時代を生み出している社会情勢よりも、もしもっと安定した条件さえ存在したならば、ちゃんと順番に成熟したであろう草の実、木の葉、嫩芽、胡椒等々というものが、一枚、一茎、一粒として存在しないのだった」というもの。これは、もし *which will grow to maturity* が *which would grow to maturity* とでもなっていたならば、ありえたであろう解釈。しかし *will grow* でもあり、*under conditions* 以下を条件ととるのは苦しい。また、一木一草の影すらもないというのは現実そのものの認めるところではなかろう。しかし蹟くにさえ作法も崩れず、理路をはずさぬ背筋の通った姿勢には、さすが大翻訳家、大教

養人の面目躍如というところか。

平凡社版オーウェルの訳者はこの誤りに気づいた。一木一草の影すらもないなどありえないのだから、育つかどうか心許ない、とまで退いたわけであろう。ほとんど、もうこれでいいようなところまで、あたらずとも遠からずといえるところまで来ているとってよかろう。しかし、今一步のところがまだ残るものと私には思える。仔細に原文を見ていると、こういう無残な現実以上に安定した状況下に生い育つようなものは一木一草といえども存在しない、と言っているように思える。すなわち、一木一草といえども、こういう無残な状況の下でしか生い育つことはない、と言っているように思う。more certain を less horrible; less insecure と読んでそう読めるように思う。だから、この訳に少し手を加えるとして「このように恐ろしいものを生み出した土と気候の下でしか…成熟するまで着実に育ってゆくことはなかろう」（傍点筆者）とすればほぼよろしいのではなかろうか。ただし、これは、私はこのように読む、というにとどまる。

「しかし革命は結局のところものごとをさかさまにすることなのだから、現在流行している政治、経済的批判が革命的ではないかもしれないと同様に、単に道徳的であるに過ぎない社会批判は『革命的』ではないとは断言できない」（p. 391；下線筆者；But it is not at all certain that a merely moral criticism of society may not be just as “revolutionary” — and revolution, after all, means turning things upside down — as the politico economic criticism which is fashionable at this moment., p. 427）。このうちの下線部分は、そこまで先を読んでしまうべきではなくて「革命的であるのと同程度には」だろう。

ブレイクから引いている詩の「私はひとつひとつ地番が公認されている街路をさまよってゆく」（同前；“I wandered through each charter’d street”, Ibid）は、「ひとつひとつ地番が公認されている街路」では「資本主義社会の性質に対する洞察がある」とは分かりにくかろう。「特許を与えられてい

る街区」がよかろう。

163の「カンニング」(p. 429 ; canings, p. 464) は「鞭打ち」であろう。

「ブーツとステッキがいつでもすれ合ってばたばたいている彼の窮屈なズボン」(p. 435 ; His tight trousers against which boots and canes are constantly thudding, p. 470)。どんなズボンか、いくら想像してみても分からない。オーウェルは、こんなシュールレアリスティックなことを、しかも散文の評論の中では決して言わないはずだか…。「ブーツと鞭の集中砲火をいつも浴びている彼の窮屈なズボン」らしい。

ようやく第一巻を終わった。

* * *

第三巻は簡単に終りそうである。ほとんど言うこともなくて省略しても困らない程度と予測している。

15, 「自分たちの反戦活動の埋合せをしようとする共産主義者」(p. 69 ; Communists anxious to live down their own anti-war activities, p. 75) は、読者はこれを見て「反戦活動の埋合せ」がすぐには分からないだろう。独ソ不可侵条約を受けてコミュニストはスターリンに忠実であるために、イギリスのヒトラーとの戦いにきわめて否定的に行動したのが「反戦活動」だから、そしてその後また日和を見て態度が変わったのだから、「反戦活動という失点」までは言わないと困るだろう。

17, 「もしどれかひとつの言葉が世界的な『第二』国語として採用されるとすれば、それが¹作られたものであることはとてもあり得ないことであろう。そして現存の²自然のものなかでは、かならずしも³基本的な形のままではないとしても、英語には大いに可能性がある」(p. 79 ; 下線筆者 ; If any language is ever adopted as a world-wide “second” language it is immensely unlikely that it will be a manufactured one, and of the existing natural ones English has much the best chance, though not necessarily

in the Basic form., p. 86)。1は「人工言語」、2は「自然言語」とする方がすっきりするだろうし、3は Basic と大文字なのだから「ベーシック英語のようなものでなくても」であろう。「『第二』国語」も「『第二』言語」だろう。

19, 「ひとつの信念を、それが非合理的であるといつて片づけたりする者はいない」(p. 84 ; One dose not dispose of a belief by showing that it is irrational., p. 90)。この日本語だと、「ひとつの信念を、それが非合理的であるとい」う者も、「ひとつの信念を」「片づけたりする者」も同一人物としか受けとれない。「ひとつの信念は、そんなものは非合理だよと試みてみたところで、だからあっさり捨ててしまうような者はない」ぐらいに言えば少しはよからうか。

小さいことのようにだが22に「婚前なんとかじゃないやつだ」(p. 90 ; Nothing extra-marital, p. 97) とあるが、「婚前」は premarital で、ここは「婚外」。このあたりのことになると古い人間はとんと遅れていて、なにもかもをいっしょくたにしたがる。『一九八四年』のハヤカワ版も inside marriage as well as outside it を「既婚、未婚の場合を問わず」(文庫 p. 84) なんてやってくれるからかなわない。

23, 「われわれの時代のほんとうの問題は、絶対的な善と悪の感覚を取り戻すことである」(p. 93 ; 下線筆者 ; The real problem of our time is to restore the sense of absolute right and wrong, p. 100)。good and evil と right and wrong は微妙に、しかし決定的にちがう。やはり「正と不正」とすべきであろう。24には、はっきりと「天国と地獄とは別の善と悪の体系」(p. 97 ; a system of good and evil which is independent of heaven and hell, p. 103) が出てくるのだから。

26に「『引退』を祝っている酔っぱらいのカトリックの実業家」(p. 100 ; drunken Catholic businessmen celebrating a “retreat”, p. 107) とあるが、retreat はカトリックの用語で「静修」とすべきもの。『ダブリナーズ』のこの場面を忘れたので、しかとは言えぬが、宿の部屋か何かで一人で酒を飲

んで自分は今静修中だとか、ふざけて言っていることでもあったろうか。引用符がついているのだから。

「卑しくても欲しげな短い死亡記事」(同前 ; a mean, cagey little obituary, Ibid) は「下卑て抜け目のない、けち臭い死亡記事」だろう。

「しかし作家や芸術家の場合は、彼が少しでもよいなら、あざ笑っておかねばならない」(同前 ; but a writer or artist must be sniffed at, at least if he is any good, Ibid.) は「しかし、少しでもすぐれた作家や芸術家だと、あざ笑われずにはすまない」だろう。

「『春本書き』というのが普通の形容詞であった」(同前 ; “pornographer” was the usual description, Ibid.) は「普通の形容」のかわりに「おなじみのレッテル」では？

「しかし、俗物的な死亡記事はジョイスの方で予期していたものにほかならなかったであろう。フランスの崩壊、そして一般の政治犯のようにゲシュタポからのがれねばならない必要は、別のことであった」(同前 ; But the snooty obituaries were merely what Joyce would have expected. The collapse of France, and the need to flee from the Gestapo like a common political suspect, were a different matter, Ibid.) は「ジョイスの方で予期していたものにほかならなかった」で切れればよいので、「であろう」など、場ちがいの would に色目を使って、もったいぶった文句をくっつけるのは願ひ下げにしてもらいたい。これは相当に snooty であろう。「しかし鼻持ちならぬ死亡記事はジョイスの方で予期していたはずのものでしかなかった。フランスの崩壊、そして一般の政治犯容疑者なみにゲシュタポの手を逃がれねばならぬとなれば話は別だ」となろう。

29, 「もし今、『ドイツに払わせろ』という観点から考えているなら、一九五〇年にはヒトラーを讃美していてもきわめてあり得べきこととなるであろう」(p. 110 ; If you think *now* in terms of “making Germany pay”, you will quite likely find yourself praising Hitler in 1950., p. 117)。この後半の訳文は作業行程半ばにしか達していないものである。まだ仕上げもす

まぬまま半製品を出荷するような横着はやめた方がよい。「今におよんで『ドイツに払わせる』式の考え方をしているようなら、一九五〇年にはヒトラーを讚美していることにもなりかねぬ公算は大きかろう」で仕上げに達する。

35, 「だから、われわれは実際に演壇に立って、この挿入個所の文章を、彼がとうとうと吐きだしているところを考えてみないといけない」(p. 129 ; so one must assume that Professor Laski actually stood up on a platform and spouted it forth, parenthesis and all., p. 137) は「だから、ラスキ教授が実際に演壇に立って、挿入個所ぐるみ、とうとうとまくし立てているところを想像する必要がある」だろう。

68, 「悪いのはその個人であって制度ではない」(p. 228 ; Individuals, and not the situation, are to blame., p. 240)。たあいまいことのようにだが、situation はやはり「制度」ではないだろう。「悪いのは個々人であって、革命という状況ではない」ということだろう。

86, 「となれば、必然的に新聞の政治欄や文学欄からは、ややずれることになる」(p. 298 ; This involves, unavoidably, a slight divergence between the political and the literary sections of the paper., p. 312)。これではいったい何が「ややずれる」のか分からない。「となれば、必然的に本紙の政治欄と文学欄とには、いささかのちがいが生ぜざるをえない」であろう。

92, 「ポーランドの接近地域となるドイツの一部」(p. 313 ; the portions of Germany to be taken over by Poland, p. 327) は「ドイツの一部、ポーランドによる接收予定地」であろう。

以上で『オーウェル著作集』（平凡社）全四巻の翻訳点検を終る。終るといふより、ひとまず終ることとする。先にも言ったとおり、原文を首っぴきで調べたわけではなく、日本語として読んで読みが下らなかつたり、何やら違和感があったりというところを手がかりに原文にあたった程度のことである。うっかり読み過ごしているところもまだまだ残されていることとは思う。

しかし、水も洩らさぬというほどに徹底した仕事をするなどできない相談でもあり、そんな気もない。たまたまオーウェルの作品を、あらましすべて読むような機会があって、この翻訳にもお世話になった。お世話になりすぎたということもあって、こんなものまでできあがってしまったというまでのこと。しかしながら、今さら二十年も前のものを、というのはあたらないだろう。二十年だろうと三十年だろうと、あるものをないとは言えなからう。外国語を扱う人が、そしてかりにもそれによってゼニを取ろうという人が、こうまで日本語を粗末にできるものかという驚きは、二十年経っても消えたわけではないからだ。それならばなおのこと、二十年も経って、その後訳者らも腕を上げた人もいれば、そうでない人もいるだろうが、ともかく面の皮だけは十分厚くもなっていようから、こんなものを見せられたところで、自分の子どもがまだ未熟なのを見るぐらいの気でいられるだろう。時に勢い余って言わでものことまで言ったというところもあるだろうが、「それ見たことか」と思うもよし、「俺もばかだがお前もばかだよ」と思っていたゞけるなら、それも大いに救いがあるというもの。翻訳の心得は、どこまでもへりくだることのほかにはないと、私は考えているからである。また、こんな人目にもつきにくい雑誌の片隅に書いたものゆえ、ろくろく読む人もいないかもしれぬが、私としては腹にたまったままでは気分が悪い。この場を借りて吐き出しておくというまで。(了)

(1989年7月3日脱稿)

(1989. 7.14 受理)

* 本誌第2号で本稿(その2)の受理日が誤っておりました。正しくは1989年7月14日です。お詫びして訂正いたします。